

第2章 世界の八隅

日本政府はしばしば、「大東亜」を建設すると声明していた。しかし、「大」の程度は全く分からなかった。その理由は「大東亜」には限界はなく、日本の現人神の天皇の旗を世界の隅まで掲げることを目標としているからである。限界があるとすれば、このために必要な物資と人材のみである。これは空想的に聞こえるが、その程度は日本政府の他の声明と変わらない。日本が現在の征服領土の範囲の制限を解除すれば、日本の最終目標は全世界であることが明らかになる。

軍国主義者の最高位の者から下級官僚まで、公式刊行物と公式表明を通じて、日本の目標は「八紘一宇」であると世界に発信してきている。彼らによると、「八紘一宇」とは「世界の八つの隅まで、一つの屋根の下に置く」という意味だ。これは何年か前から現在まで、日本の外交政策の基礎になっている。たとえ、民主主義諸国から世界は球で、隅は無く、空想の話だと言われたとしても、彼らは命がけで実行した。そしてその空想は真珠湾攻撃の類だ。

田中メモリアルは、満州と中国征服の概略計画書で、その後1927年に総理大臣になった田中から天皇に書かれた文書だとされているが、日本からは偽造という烙印が押されている。これは、最初に上海で発表されたもので、もし、日本がこの文書に対して激怒しているとすれば、それは彼らの目的から歪曲されているからではなく、それが彼らの目的をあまりにも具体的に暴露してしまっているからであろう。もし、この文書に何か疑念があるとすれば、それは日本が日本自身を理解するよりも、著者が正しく日本を理解し、公開したことである。しかし、田中メモリアルがなくても、日本の目的は宣言されている。その宣言は、1941年の夏、真珠湾攻撃の数か月前に出版された彼ら自身のバイブルに書かれている。1941年の中頃、このバイブルはアメリカでは空想的なものだと考えられていただろう。年末には、このバイブルのメッセージは太平洋の至る所に爆発的に広まった。

もともと、日本の国教の神道にはバイブルはなく、暗黒時代から記載ではなく口承によって伝えられていた。1941年までは神道について記載された書物がなかったため、日本人の人々によって神道の考えが異なっていたり、或いは神道について無関心の方がいたりした。この1941年に日本政府は、ヒトラーの「我が闘争」がナチスに役立ったように、困惑している日本人を助けるために何かが必要だと確信し、「日本国民のバイブル」といえる小冊子「臣民の道」が出版された。これは近衛内閣の指示で文部省によって書かれ、第一版は、三千冊が日本の全ての学校に配られた。卒業しようとしている日本の若者に、死のために出征されることの素晴らしいさを感じさせるために至急配る必要があった。

「臣民の道」では簡単な三つの章に解答が付いてあり、一日に二、三分読むだけで、直ぐに天皇に忠実な臣民が如何にして生き、死ぬべきかを知ることが出来る。そして、それだけではない。第一章の前半の三分の一には世界の歴史をあつという間に理解できるようになっており、難解な学術書を苦労して読む必要はない。貪欲なアメリカ人については鋭い言葉を

一つか二つ、信用できないイギリス人についてはもうひとつの言葉だけで、日本人の生徒は民主主義国家の金権政治の邪悪な心について、大学院課程の勉強をしたことになる。

バイブルの序言には、臣民の使命は「天と地に共存する皇位を守り維持する事」であると書かれている。西洋懷疑論に感染した者は注意する必要がある。それは、これが馬鹿げた抽象的なものだからではなく、これが「歴史に基づいた毎日の実践の道」だからである。序言はさらに続く、個人主義、自由主義、功利主義、唯物主義がこの国に入り込み、「我々の先祖から遺贈された高潔な習慣」を妨げなければ、このバイブルは、先祖の時代と同様、不要だったであろう。満州と中国への侵略後、日本人の眞の国民精神が高揚していることを、バイブルは認めている。しかし、アメリカから輸入した機械と原料と共にいくつかの考え方を忍び込み、多くの日本人に疫病を残す。したがって、「この状況が放置されると、西洋とアメリカの思想の悪魔が日本国民の生活の様々な階層に深く侵入し、それを根絶することが困難になると思われる」ため、国家のバイブルの出版が必要となった。

明らかになったように、民主主義の考えが封建思想の神聖な統治をむしばみ、軍国主義者による侵略的な政策を妨げることになる。バイブルは第一章では皇民に、軍国主義者が計画した新たな世界秩序のあり方について説明し、準備した世界史の方向性を提供している。まず、ヨーロッパ諸国が植民地を征服することによって豊かな帝国を建国するという、極度の悪事を行っており、その植民地の中には豊かな植民地が、日本近傍で手が届くところにあることに触ると、バイブルは突然、第一次世界大戦を追い越して、（予想通りであるが、）「英國、フランス、米国支配の独占的な世界」について強調して説明している。これらの貪欲な列強と一緒に、ドイツと戦っている間に、日本が中国に不法占拠していることには触れず、日本が彼らと協力してドイツと戦争していたことにも触れていない。これらの事実をドイツと同盟している国の現代のバイブルには書くわけにはいかなかったのだ。

第一次世界大戦で勝利した国々（日本が参加していたことは言及していないので、日本は除く）は、「強者が弱者を捕食するのは合理的であるとみなし、快楽主義を無制限に助長し、拡大した物質的生活を求める、植民地獲得と貿易確保の競争を刺激することになった。こうして、複雑な原因と結果によって、世界を紛れもない戦いと流血の地獄に導いたのである。」実際、複雑だったので、この日本のバイブルの著者らは、流血やまさに地獄のような南京やその他の中国の多数の都市での強姦について詳しく触れるつもりは毛頭なかった。

天皇の臣民は既に気づいていたかもしれないが、これらの考えから最終的に言いたいことは、現状維持を主張する三つの邪悪な民主主義諸国を崩壊することである。このバイブルによると、これらの国々の代わりに、日本が「道徳的な原則を基盤とした新たな世界秩序」の建設のための活動を開始した。それは満州「事変」から始まっており、これは「長らく抑圧されてきた日本の国民生活の暴力的な爆発」だと説明している。ここでは、満州国の新国家において三千万人以上の中国人の弾圧で終わったという事実については言及していない。

その代わりに、満州事変は日本の「世界的使命」の進化の過程において、不可避だったところのバイブルは述べている。ここで、このバイブル全体の核心である「八紘一宇」に行き着いた。

日本で、恐らく神話的な最初の支配者である、神武天皇が都の場所を決め、皇位に即位した2602年前に、次のような宣言を発したと伝えられている。

「従って、都を拡大して六つの主要な場所を取り巻き、世界の八隅を包囲して、一つの屋根を形成する。これはいけないだろうか？」

（**「然る後、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩いて宇と為さん事、亦可からずや。」
日本書紀卷第三・神武天皇即位前紀己未年三月丁卯条の「令」）

これは、中国人と他の日本に侵害された被害者にとって、どうであろうが関係なく、神聖なメッセージとしては申し分なく、軍国主義者はこれを用いて、臣民による殺人と暴力を正当化し、彼らを世界征服の道へと煽り立てることが出来た。「世界の八隅を一つの屋根の下に」は1894年の中華人民共和国への最初の攻撃（**日清戦争）の時から、日本の軍国主義の基本原理である。日清戦争で、貪欲な西洋列強に対する将来の作戦拠点として台湾を占領し、1905年にはその列強の一つを負かせ（**日露戦争）、当時のルーズベルト大統領が、賢明さに疑問があるが、日本に有利に仲裁し、アジア大陸との連携を確保するために日本を選んだ。それは日本の「神聖な使命」である、世界征服遂行の動きでもあった。

最近の歴史が示すとおり、世界の八隅は固定していない。隅にはどこでも日本人が他国の土に楔を打ち込み、神社を建てることに成功し、神様に子供が眠ることなく、民主主義の受動的な唯物論の犠牲者に陥っていないことを示している。神武が拡大することを頼んだ都の屋根は、今はまだ、アジアの十億人、オセアニアの一千万人を覆っているだけかもしれないが、明日、明後日になると神による加護が提案されるのはアフリカ、ヨーロッパや西半球にも広げられることになるだろう。日本の八隅の良いところはそれが固定していないことだ。それらは日本の世界が拡張することで変化する。神武天皇の神勅を天照大神の子孫が実行する手腕によって、ある時は、それが東京、台湾、シンガポール、マニラ、バンコク、北京だったのが、他の時は、東京、ウラジオストク、バタビア、メルボルン、ホノルル、ノーム、シアトルへと変化する。

まだ占領されていない地域の住民で、自分たちの都市がバイブルで言及されていなければそのことで安心するだろう。しかし、言及されている地域の住民は、安らぎを見いだすことはできない。1941年夏版のこのバイブルには、中国を含め、「インド、トルコ、アラビア、タイ、安南他」と記載されており、日本に侵害され、犠牲になっていたことが回想されることになるだろう。この本を執筆中に日本は既に中国を含めて、タイ、安南と「他」を制圧している。もちろん、このバイブルは征服目標の国々を言及していたわけではない。これは「武

士道」や中世の日本刀の斬り方の作法に従ったからではない。バイブルには、これらの国々が「英米による束縛と屈従から解放」されることを望んでいると書かれているのみで、誰がこの解放を行うかについては、日本の歴史の専門家からの指摘は求めていない。バイブルにはこのような専門家は不要だ。日本が日露戦争で勝利によって、言及した国々に自由への希望の火が付き、中国に新たな民族運動を刺激したことをバイブルは説明し、それに続けて、「このアジアの再覚醒の雰囲気が高まる渦中で、東アジアの安定化が我が国の使命であり、東アジア諸国の解放は我が国の努力にこそ、かかっていることを痛感するようになった。」このように、わかりやすく説明している。

東アジアに住むことほど幸福ではない人たちを怒らせないように、バイブルは急いで、「日本の理想は六つの主要地点と世界の八隅を一つの屋根の下に置き、都を拡大することであり、これを基にした天皇の精神を全世界に明らかにすること」であり、日本の主要な目的は東アジアに制限されるのではないだと説明している。

これもナンセンスに聞こえるなら、日本のバイブルと同じように、1940年9月の日本、ドイツ、イタリアの三国同盟締結の際に裕仁が述べた詔書の一部を引用することで、一部の人々が冷静になるかもしれない。以下に詔書を示すが、今日の日本では詔書が法律よりも強力であるという事実を念頭に置いて欲しい：

「私たちの偉大な道徳的義務があらゆる方向に拡張され、世界が一つ屋根の下に統一されるべきであるということは、私たちの天皇の先祖たちから遺された偉大な教えである。これが我々が毎日毎日、忠実に従うことである。」

(**日本國、獨逸國及伊太利國間三國條約締結ニ關スル詔書

<https://ja.wikisource.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%9C%8B%E3%80%881%E7%8D%A8%E9%80%B8%E5%9C%8B%E5%8F%8A%E4%BC%8A%E5%A4%AA%E5%88%A9%E5%9C%8B%E9%96%93%E4%B8%89%E5%9C%8B%E6%A2%9D%E7%B4%84%E7%B7%A0%E7%B5%90%E3%83%8B%E9%97%9C%E3%82%B9%E3%83%AB%E8%A9%94%E6%9B%B8>

大義ヲ八紘ニ宣揚シ坤與ヲ一宇タラシムルハ實ニ皇祖皇宗ノ大訓ニシテ朕カ夙夜眷々措カザル所ナリ而シテ今ヤ世局ハ其ノ騷亂底止スル所ヲ知ラズ人類ノ蒙ルベキ禍患亦將ニ測ルベカラザルモノアラントス朕ハ禍亂ノ戡定平和ノ克復ノ一日モ速ナランコトニ軫念極メテ切ナリ乃チ政府ニ命ジテ帝國ト其ノ意圖ヲ同ジクスル獨伊兩國トノ提攜協力ヲ議セシメ茲ニ三國間ニ於ケル條約ノ成立ヲ見タルハ朕ノ深ク憚ブ所ナリ

惟フニ萬邦ヲシテ各其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンゼシムルハ曠古ノ大業ニシテ前途甚ダ遼遠ナリ爾臣民益國體ノ觀念ヲ明徴ニシ深ク諜リ遠ク慮リ協心戮力非常ノ時局ヲ克服シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼セヨ)

明らかに、裕仁は神武の指示が単なるジョークだとは思っていない。彼はそれを十分に真剣に捉え、神聖な神であり、天照大神の直系の子孫である彼が、近衛政権が決定した、大日本帝国にとって歴史上、最悪で、恐らく悲惨な三国同盟を締結した理由を、七千二百万人の臣民に説明するのに、この神武の指示を使用したのである。彼は三国同盟と大日本帝国による全世界の支配の間に問題がない限り、三国同盟は皇国の統治を拡大する日本の政策に完全一致していることを明らかにした。日本の目的をこれ以上明らかに宣言できる人はいないだろう。しかし、これは海外では無視された。

(**米國及英國ニ對スル宣戰ノ詔書

詔書捧讀

詔書。天佑を保有し万世一系の皇祚を践（ふ）める大日本帝国天皇は昭（あきらか）に忠誠勇武なる汝有衆に示す。

朕、茲（ここ）に米国及び英國に対して戦を宣す。朕が陸海將兵は全力を奮って交戦に従事し、朕が百僚有司は励精職務を奉行し、朕が衆庶は各々其の本分を尽し、億兆一心國家の総力を挙げて征戦の目的を達成するに遺算なからむことを期せよ。

抑々（そもそも）東亜の安定を確保し以て世界の平和に寄与するは、丕顯（ひけん）なる皇祖考、丕承（ひしょう）なる皇考の作述せる遠猷（えんゆう）にして、朕が拳々措かざる所。而して列国との交誼を篤くし、万邦共栄の樂を偕（とも）にするは、之亦帝国が常に国交の要義と為す所なり。今や不幸にして米英両国と釁端（きんたん）を開くに至る。洵（まこと）に已むを得ざるものあり。豈朕が志ならんや。

中華民国政府曩（さき）に帝国の真意を解せず、濫（みだり）に事を構えて東亜の平和を攬乱（こうらん）し、遂に帝国をして干戈を執るに至らしめ、茲に四年有余を経たり。幸いに国民政府更新するあり。帝国は之と善隣の誼（よしみ）を結び相提携するに至れるも、重慶に残存する政権は、米英の庇蔭（ひいん）を恃みて、兄弟尚未だ牆（かき）に相鬪（あいせめ）ぐを悛（あらため）ず。

米英両国は、残存政権を支援して東亜の禍乱（からん）を助長し、平和の美名に匿れて東洋制覇の非望を逞（たくまし）うせんとす。剰（あまつさ）へ与国を誘（いざな）い、帝国の周辺に於て武備を増強して我に挑戦し、更に帝国の平和的通商に有らゆる妨害を与え、遂に経済断行を敢てし、帝国の生存に重大なる脅威を加う。

朕は政府をして事態を平和の裡に回復せしめんとし、隱忍（いんにん）久しきに弥（わた）りたるも、彼は毫（ごう）も交譲（こうじょう）の精神なく、徒（いたずら）に時局の解決を遷延せしめて、此の間却って益々経済上、軍事上の脅威を増大し、以て我を屈従せしめんとす。

斯（かく）の如くにして推移せんか。東亜安定に関する帝国昔年の努力は悉（ことごと）く水泡に帰し、帝国の存立、亦正に危殆に瀕せり。事既に此に至る。帝国は今や自存自衛の為、蹶然起って一切の障礙を破碎するの外なきなり。

皇祖皇宗の神靈、上に在り。朕は汝有衆の忠誠勇武に信倚（しんい）し、祖宗の遺業を恢弘（かいこう）し、速やかに禍根を芟除（さんじょ）して、東亜永遠の平和を確立し、以て帝国の光榮を保全せんことを期す。御名御璽。昭和16年12月8日。各國務大臣副書。）

もし、コーデル・ハル国務長官が、開戦直前のアメリカ提案（**ハル・ノート）に対する日本政府の最後通牒を理解するのが困難で、それを「この文書は恥すべき虚偽と歪曲が満載で、その多さは、私は今まで考えたこともなかったか程の規模だった。これを発する政府は地球上存在しなかった。」と感じたのならば、それは、「八紘一宇」の意味を理解していなかったからである。記録として残るのは遺憾であるが、それが我が国の対日外交政策がこれほど不幸にした理由であった。「八紘一宇」を理解していなかったがために、1941年にも1905年にも日本政府に正しく対処することが出来なかった。日本政策のこの基本原則を見抜くことができなかったために、ハル長官とルーズベルト大統領は、アメリカ政府に提出された以前の文書にある他の「恥すべき虚偽」を受け入れることが困難だったのかもしれない。

東京にいた我々の多くはしばらくの間、「八紘一宇」のような思考を厳肅かつ真剣に支持する日本のような政府は、アメリカでは恥すべき虚偽とみなされるに違いないと確信していた。我々は東京での毎日の仕事は大氾濫な状況だった。特派員は、いかなる信念があるにしろ、これらの「虚偽」を受け入れなければ仕事はできなかった。これらは、公的報道官の声明、報道における国務大臣のインタビュー、日本当局者との私的な会話、日本の官営通信社

である同盟通信社によるレポートなど、あらゆるところから出てきた。東京の特派員の仕事はこれらを解釈し、変更して、これらがアメリカの新聞記事として認識されるようになると、これは日本在住の「客」にとって極めてばつの悪い業務であったが、私たちの多くは、その業務で日本政府関係者から喜ばれることはなかったにもかかわらず、できる限りの努力をした。

例えば、タイとインドシナ間での境界紛争中に、1941年初めに日本が仲裁すると声明した。しかし、日本が「仲裁」する前から、多くの特派員は、海外で通常考えている「仲裁」を日本にはできないと確信していた。日本にとっての仲裁とは代理人として両者を脆弱化し、「仲裁者」による征服を容易にするための単なる手段に過ぎなかった。もし、仲裁声明が虚偽だとすれば、近衛政権が宣言した大東亜「共栄」の「新秩序」建設の意図も同様に虚偽だったことになる。

「共栄」と言う言葉の意味は日本人と日本人以外では異なっている。たとえ彼らが同じ言葉を使っても、通常、異なった言語を使っている。これは彼らの意識が二つの異なった世界に存在しているからであり、これが、ハル長官が東京から送られた最後の伝達内容を理解できなかった理由である。東京とワシントンは首都であるが、異なった惑星に存在する。国務省に直接従事し、最も有能な職員かも知れないハル長官に落ち度はなかった。彼にも、ルーズベルトにも、他のいかなるアメリカ人にも「八紘一宇」を完全に理解することはできなかった。西洋人の意識では理解できない。それは亡くなった先祖への崇拝を理解できないことと同じである。八紘一宇は日本人の意識の産物であり、日本人のみが、多神教の神と同様、人間でありながら神でもある支配者が災難を回避し、幸せを導き、病気を治してくれるとして、この現人神を崇拝し、これに関与する八紘一宇を純正な原理として受け入れることができるのである。日本政府による文書は、二十世紀に存在する封建思想の産物であり、もしこの思想が我々にあったとすれば、それは中世の暗黒時代に何処かで葬っていたものである。

しかし、日本に対して公正な立場から言うならば、彼らの意見がアメリカ人の意識からは「虚偽」だと見えたとしても、日本人の意識からは必ずしもそうではなく、その逆も同様であり、我々が真実だと信じて述べた意見を日本人は虚偽だとみなすのである。個人の日本人と個人のアメリカ人の間に真の意思の一致が存在しないのと同様に、日本とアメリカの政府の間にも意思が一致することはない。公平に言うならば、ハル長官が「恥ずべき虚偽」だと烙印した意見は日本人にとってはそうではなく、最も純粹に、そして、最も誠実に述べられたものなのである。実際、日本政府がすでに12月7日の攻撃に向けての軍艦を派遣していたにもかかわらず、交渉の経過を振り返り、合意が得られなかった理由を述べた長い文書をわざわざ作成してアメリカ政府に提出する必要は全くなかったように思われる(**米國及英國ニ對スル宣戰ノ詔書)。日本がこの最終公書を送った理由は彼らの「武士道」の意識だけだったと考えるのが恐らく正しいことだと思われる。この「武士道」は奇妙な中世の侍の作法であり、非常に奇妙で、よりによって、この作法がワシントンに現れたのである。

日本人の考え方では、敵の悪行と侍の名誉ある意図について十分な説明が与えられるまでは、敵を攻撃することは正しくなかったのであろう。彼らの回答の提出は、敵を攻撃する前に、敵に自分自身が正しいことを明らかにすることが、2602年間忠実に守られた伝統に従ってこれまで必ず行われてきた、天照大神への報告として、必須であると考えたからである。

ハル長官が信じられないと下した日本が書いた覚書を日本人は厳粛に信じていたのであろう。第三段落は既に言及した詔書の最後の部分をほとんどそのまま引用されており、「東アジアの安定を確保と世界平和を推進し、これによって、すべての国民の各々が世界で適切な場所を見出すことを可能にすることが日本政府の不变な政策である」と書かれている。これを詔書の後半の「世界の八隅を一つの屋根の下に」の宣言に続いて、「我々はすべての国民が適切な場所を探すことが出来て、無数の人々が平和を享受することは比類のない規模の事業であると信じている」を比べて欲しい。どちらの文書も、アメリカ人には同じように前例がないほど理解不能であるのに対して、日本人にはこれらは完璧に理に合っているように見えるのである。

私と他のアメリカ特派員は、この種の発言について日本人と一時間議論したことがある。私たちは彼らに、自国の軍隊がアジア大陸上で暴れ回り、東アジアにこれまで存在していたあらゆる安定を破壊していることをよく知っているのに、どうやって「東アジアの安定」について語ることができるのかと尋ねた。彼らの答えは素朴で、誠実なものだった。彼らの答えは、昔の安定性の種類は「永続的」でも、「健全」でもないということだった。要するに、それは「八紘一宇」に沿っていなかったということだ。つまり、日本人は国旗を持って遙か遠く、地球の反対側からやって来た者と出会うまで駆け抜けなければならない。そしてその時、日章旗の屋根を広げて全世界の人びとをその下に住まわせ、国民すべてをそれぞれの「あるべき場所」に置くという勅命がついに達成されたことを伊勢神宮で天照大神に報告しなければならない。封建的な日本人の意識にとって、「日本の安定」、「八紘一宇」の安定でない限り、たとえ天皇の神々や狂信的な神道の宮司達が安定だと認めたとしても、安定ではない。

コモドール・ペリーが日本の東端に穴を開けたら、「八紘一宇」のような、攻撃的で獰猛な封建的信条が逃げ出し、それが民主主義諸国と残りの世界を苦しめることになったとき、民主主義諸国は自分たちが何に巻き込まれているか、ほとんど分かっていなかった。我々が、「地球上のいかなる政府」がどうやってこの信条を抱くことができるのかを想像するのは不可能だったのかもしれないが、日本政府にはこの信条を抱くことが出来ていて、さらに、高度に訓練された西洋の頭脳の冷静さと優れた熟慮を有しながら、この信条を実行していくことに、民主主義諸国は、遅すぎたが、気付きつつあるのかもしれない。西洋の技術的な才能を吸収しながら、封建制度の精神には何らダメージがない日本人の心の需要能力には、日本のもう一つの「驚き」がある。

「世界の八隅を一つの屋根の下に」は狂人が言っている様に聞こえるかもしれないが、それにもかかわらず、そう言っている男は西洋の教師から教えてもらって作った武器で武装された。民主主義諸国は神武と祖先に反して武装解除するか彼らを殺さなければ彼らに対する罪を犯すことになる男に無意識的に武力を与えた。彼は何世紀にもわたり、迷信と軍国主義者によって常に被害者であった天皇を崇拜する封建的信頼に傾倒し、軍国主義者は世界を征服し、その上に神武の毛布を広げるという神聖な使命を持っていると確信していた。民主主義諸国は、彼らのバイブルが公開され、何年にわたって彼の行動が公表されているにもかかわらず、その信条に耳を傾けることを拒否した。したがって、民主主義諸国は損傷されたことに驚き、たじろぐ理由を日本が警告なしだったとするのは全く正当化できない。たとえ真珠湾攻撃の前に告知することが出来なかつたとしても、基本的な目的については、彼らは十分過ぎるほど警告を発していた。残念ながら、この地球上で、日本人以外で警告を完全に理解できる人はほとんどいなかつたため、この警告を信じる人はほとんどいなかつた。

民主主義諸国は自らに世界を征服する神聖な使命があるとは思ってもおらず、短絡的に他国でもこのような使命を持っていないと信じていた。そして、日本が公式に米国と英国を、「日本と中国の全面的な平和の設立を妨害した」と非難する理由を、米国と英国が理解できなかつたのも、彼らの視野の狭さを示している。日本の言う「平和」の意味は天照大神の平和であり、それに達していかなければ、戦争しかありえないということであるが、当然ながら、彼らはこれが理解できなかつた。彼らはまた、中国の日本からの攻撃への抵抗を支援することが、実際には天照大神の意志と神武天皇からの命令の侵害になっていることを理解していなかつた。これは不敬罪に他ならない。日本では、この天皇の根源に対する犯罪には死刑を執行するしかない。そして、彼らは真珠湾でこれを遂行したのだ。

しかし、民主主義諸国が日本を理解できなかつたように、日本は米国と英国の意見を理解することが出来なかつた。日本人は、他人の思いと行動が彼らのものとは異なっていることが分からず、「民主主義（デモクラシー）」とは彼らの「八紘一宇」の後にできた、嘘の信条であつて、米国と英国が世界を支配することを可能にするため作られていると疑っていた。日本人は天照大神が世界を征服する軍隊を組織するために、孫をコロンビア特別区ではなく、九州で地上に降ろしたので、日本文明が世界最古であり、日本が世界で唯一選ばれた民族だと考えており、従つて「八紘一宇」が二つあるはずはなかつた。

従つて、コロンビア特別区にある「八紘一宇」民主主義は、すぐに日本人の目には神々への侮辱として決めつけられ、このことが、学生に配られた日本のバイブルの中に公式に記されている。このバイブルの第一章の冒頭では、西洋諸国が極東を含む、世界のあらゆる地域に進出して世界制覇を果たしたこと、「傍若無人な行動をしても、当然のことだと考えることになった」と学生に教えている。バイブルの編集者は、おそらく、日本人も同様に、「傍若無人な行動」を正当化しているとの印象を読者が受けるとは想定しておらず、彼らが主張したいのは、間違いなく、西洋列強国の拡大は八紘一宇の精神の破壊であり、日本人にとつ

て西洋列強国を葬らせるることは道徳的であり、これに抵抗することは天照大神に対する罪であるということである。

彼らの神々に反する罪を正すために、日本のバイブルでは後に、次のように説明している。

「支那事変（日中戦争）は日本による道義的世界建設の途上における一段階である。世界永遠の平和を確保すべき新秩序の建設は、支那事変の処理の一段階（足掛かり）をしてから達成させられる。従つて、支那事変は、蒋介石政権の打倒をもって、終わりにすべきではない。中国における誤った東アジアにおける歐米勢力の邪悪を取り除き、日本が、幸福をもたらすことになる大東亜共栄圏の一環としての新しき中国の建設に協力し、東アジア並びに世界が道義的に一つに結ばれるまでは、日本の堅忍不拔の努力を必要とする。」

(** 「臣民の道」より

支那事変は、これを世界史的に見れば、我が國による道義的世界建設の途上に於ける一段階である。世界永遠の平和を確保すべき新秩序の建設は、支那事変の處理を一階梯として達成せられる。従つて、支那事変は、蒋介石政権の打倒を以つて終はるべきものではない。我が國としては、支那を誤らしめた東亜に於ける歐米勢力の禍根を芟除し、大東亜共栄圏の一環としての新しき支那の建設に協力し、東亜並びに世界が道義的に一つに結ばれるまでは、堅忍不拔の努力を必要とする。)

イタリック体で書かれた一節は、公式文書から日本の軍国主義者の目的を出来るだけ明確な言葉で指摘したものである。これを慎重に読むと日本政府は（もちろん、軍国主義者の代表として）中国での終わりのない戦争は、日本が持っている唯一の「道義的原則」である、世界を日本の神々と神道の神社で満たすための单なく「一段階」に過ぎないと考えていることが極めて明らかになる。そして彼らは、蒋介石を排除したとしても、剣を鞘に収めるつもりはないと多くの言葉で述べている。なぜなら、彼らは日本帝国の最も神聖な伊勢神社で「東アジアとその他の世界が統一する」まで終わらないと誓っていたからである。

東京にいる我々の中には、これらの一節に息を呑む者もいた。日本のバイブルを単なる冗談だと思う者もいた。彼らは、裕仁が自分の元号を「平和を照らす、昭和」と名付けたという事実から、日本の軍国主義者はそれをあえて曇らせるようなことはしないだろうと語り、書き続けた。しかし、軍国主義者が皇位と、その皇位を通じて政府と財閥を支配し、政府と財閥は甘んじて一緒に征服に赴くことで最善を尽くすことを受け入れているに違いないと確信していた特派員たちは、日本のバイブルは世界への宣戦布告に等しく、そのバイブルが日本の若者の間で流布され、野蛮な信条で彼らの道を踏み外している限り、太平洋でも他の場所でも平和はあり得ないという結論に達した。我々の中には、日本軍が米国、英國、オランダ領東インドに対していつどこで攻撃を仕掛けるかを正確に知っているふりをしている者はいなかった。日本軍が少なくとも 1942 年の春までには撤退する可能性が高いと考える者

もいたが、それでも我々は、遅かれ早かれ日本軍はできれば一か所から、必要ならすべて同時に、片っ端から攻撃すると確信していた。これを防ぐための方法は一つしかない。それは日本の軍国主義者のバイブルとそれを象徴するもの全てを破壊することだ。この破壊が出来るのは軍国主義者に対する革命によってのみであったが、軍の外部で、それを実行できる組織化されたグループは存在しなかった。したがって、東京で起こりうる一般的な見解は戦争であったため、私たちの多くは米国への報道を重視した。

集団のうち、東京のナチスが、恐らく、他の外国人よりも、「八紘一宇」の意味とその重要性を見抜いていた。彼らは日本のバイブルは我が國の教えとは完全に矛盾しており、ヒトラーによる征服計画に対する挑戦状であることを良く理解していた。しかし、彼らは日本人をあまり心配していなかった。それは、ナチスの兵器は日本の兵器よりも遥かに上回っており、枢軸国内の二国で最終決着が起こるとすれば、その世界制覇の決勝の前に、まずは、「贊沢三昧な資本主義諸国」の「段階を突破」しなければならなかった。

私は、ある午後、帝国ホテルで、あるナチスの特派員から、我々アメリカ人は日本人に対する態度が甘すぎると单刀直入に言われたことを覚えている。私は、アメリカ人はナチスの目的を第一に、何よりも理解しているが、日本についての理解は二番目になっていることを認めた。彼は笑って、第二への理解は遥かに少ないと言った。例えば、多くのアメリカ人は及川大将（戦争直前の近衛閣僚での海軍大臣）は稳健派で、アメリカ側に属していると信じているが、皆間違っていると、彼は述べた。このナチスは及川の友人で、大将が海軍大臣になるずっと前から知っていた。我々の何人かは彼の意見に傾いていたが、他の人々は、大使館員を含め、そのはずはないと確信していた。しかし、実際の出来事は、我々が後に知ったことだが、及川は南方の戦争の計画に少なからず関与していた。

ナチスが日本のバイブルをアメリカ人よりも理解しているのは当然である。ナチスには彼ら自身の教義があり、世界征服の教義を真剣に捉えることができたが、アメリカ人の聖書とは全く異なっていた。多くのアメリカ人は、特に日本人の、実際に世界征服を想像しながら楽しめるという考えが信じられなかった。東京にいるアメリカ人の一般的な考えは日本のバイブルは日本人を支離滅裂な精神へと導くプロパガンダに過ぎないというものだったが、実際にそうだったのかもしれない。しかし、ナチスが理解し、我々には見抜くことが出来なかったことは、このような混乱した精神から世界の戦士が生まれたという事実だった。

さらに、もう一つのナチスがアメリカ人よりも優位だったのは、我々アメリカ人は広大で豊富な国で生まれ、広い視野で見ることが出来ると期待されていたかもしれないが、それにもかかわらず、アメリカ人よりも、ナチスの方が、戦争と動向を壮大なスケールで見ることが出来ていたことである。実際に、アメリカ人が持っていた将来への展望は日本人よりも、偏屈で、狭かった。アメリカ人のうち、東京にいる殆どと、米国にいる人々なら間違いなく、日本人が最強の軍事大国と戦争することはなく、二つの強国に対して同時に戦争を行うこ

とはないという思い込みを心の奥深くに持っていた。私たちは、日本は最も抵抗の少ない方向に沿って進み続け、大規模な紛争に至ることはない信じていた。彼らがインドシナを占領したのは、彼らが調査し、誰も彼らを阻止しようはしなかったからだと我々は考えていた。

今ではナチスが日本の動きをもっと現実的な観点から見ていたことが分かる。彼らは、日本軍が南へ移動するたびに、南方作戦への傾倒が避けられなくなっていくのを目にしていた。そしてそのたびに、日本人が最終的に有利な立場を得ているのを見ていた。言い換えれば、ナチスは日本のインドシナ占領をドイツによるチェコスロバキア占領に似ていると解釈していたが、一般的なアメリカ人の態度はおそらくミュンヘン協定におけるイギリス人の屈辱的譲歩に似ていた。

(**ミュンヘン協定：1938年9月29日から30日に、チェコスロバキアのズデーテン地方帰属問題解決のため、ドイツのミュンヘンで開催された国際会議。イギリス、フランス、イタリア、ドイツの首脳が出席。ドイツ系住民が多数を占めるズデーテンの自国への帰属を主張したドイツのアドルフ・ヒトラー総統に対し、イギリス・フランス両首脳は、これ以上の領土要求を行わないことを条件に、ヒトラーの要求を全面的に認め、1938年9月29日付けで署名された。Wikipedia)

ここで日本の目的について二つの対立する解釈があり、新聞特派員はそれぞれの解釈を選ぶことが出来た。アメリカ大使館の公務員を含め、皆が両方の解釈があることを知っていた。私は、根本的な問題は信じるか、判断するかにあると結論した。それは、我々が、日本人が眞面目に言っていることを信じるか、信じないかである。もし、彼らがしばしば主張し、実際に「生死」に関わる「八紘一宇」と大東亜共栄圏を日本人が真剣に考えていると信じるのであれば、特派員や外交官は合衆国にレポートを送るだろう。しかし、もし、このような空想的な考えを日本人が持っているとは信じず、単なるはったりであったら、彼らは異なったレポートを送るだろう。その結果、合衆国には二種類の解釈があり、恐らく、我々の偏見によって、多くは誤った解釈が受け入れられた。

1941年1月、国際情勢における信用と判断力が非常に重要性であることを、私は強く実感した。当時、軍事参議官会議の海軍上級委員で元海軍大臣であった故大角宗生男爵大将が長いインタビューに応じ、それは東京朝日新聞に掲載された。彼は国に対して、南方地域への拡大の準備をするよう促した。「日本はある方向に向かって拡大しなければならない」と彼は語った。「地球の全ての隅々まで拡大しなければならない。たまたま、南方への拡張についての話が多くあるが、それは、個人も、国家も、自然が恵まれた地域を求めるのと同じで、当然である…。成長する国が南に拡張するのは、春に木が芽吹くのと同じくらい自然なことである…。日本が南下することに思い付いたのは、つい昨日のことだとの考えは間違っている。日本民族は千年来、南方への進出を熱望してきた。支那事変は資材と供給の確保に必要であるが、支那事変とヨーロッパとの対立の拡大が日本の南方への進行を誘発している。」

大角氏は次のように締めくくった。「将来、確実に状況が激化することは分かっている。」

これがインタビューの概要である。これに対する特派員の捉え方は異なる。もし、彼らが大角氏は「思っていることをずけずけ言っている」だけだと信じるなら、それは単なく「一つのインタビュー」であり、馬鹿げていて「ストーリー」がないと結論づけ、無視するだろう。もし、彼らが、大角氏は個人的にしゃべっているのではなく、それが、国を動かしている軍国主義者のグループの公式なものだと思うのなら、そのストーリーを海外に詳細に送るだろう。東京にいる我々特派員の中には常に安全地帯にいるグループもいた。旗色を見ている者がいた。彼らはストーリーを無視しようとはしないが、「防御」のため、あまり多くを送ろうとはしなかった。全ての特派員は日本人が本気であると信頼するかそうでないかの判断にかかっていた。我々のうち、何人かはその本気を感じ、インタビューで千語もの電報を打った。しかし、米国の新聞編集者にはそれが信じられず、殆ど意味がなかった。アメリカではインタビューが要約として公開されただけで、殆どの新聞では完全に無視された。新聞編集者が、それから一年を経たずに、日本が太平洋全域に攻撃するという、危機的現実を起こすことを察知していれば、そのストーリーはその日の最大の記事になっていたであろう。上記の出来事が我々の日本人と彼らのバイブルへの捉え方を示す一例であり、実際は起こった時にこれほどの深刻な打撃を受けることになった理由を知るための助けにもなる。

彼のインタビューが公開された直後、大角氏は極秘任務のために中国へ出発した。そして、中国南部への日本海軍視察旅行で乗っていた飛行機が墜落し、大角氏が死亡したとの発表があった。中国ゲリラは日本の救助隊が飛行機に到着する前に飛行機に到着した。重慶の報告書によると、彼らは大角氏の乗っていた飛行機から、日本軍の南方攻撃準備を明らかにする秘密文書を発見したという。これらの文書は重慶のアメリカとイギリスの当局者に報告され、その内容はロンドンとワシントンに送られた。それが 1941 年初頭の最初の太平洋戦争への恐怖の始まりであり、その後、日本の攻撃がその春に実行するとする当初の計画の事実を東京で確認することが出来ることとなった。大角氏は、神々と天皇への奉仕中で、また「地球の隅々」への拡大という日本の「神聖な使命」に関わる重要な任務の途中で亡くなった。彼が南方地域での戦争を予言したとき、私たちが今知っているように、それは三角帽をかぶった海軍大将の空論ではなかった。

日本が拡大を決定しても、その方向には分かれていた。歴史的に南方を支持する者と、北方を支持する者の間には長い歴史的分裂があった。この分裂は根本的に陸軍と海軍の利害の相違によって引き起こされた。陸軍は最も抵抗の少ない路線をたどり、アジア大陸の朝鮮に足場を築き、満州と中国北部を通って北方へ拡大することを決意した。一方、海軍は台湾を確保し、日露戦争でロシア艦隊を破った後、南方に優れた作戦基地を有するが、北方では何もすることがなかった。また、海軍が南に目を向けるのは自然なことだった。なぜなら、この戦域では海軍が支配的な役割を果たす一方、アジア本土では陸軍が勝利し、栄光を手に入れるのを傍観する以外に何もすることがなかったからだ。陸軍と海軍間の通常の職業上の

ライバル関係が日本では他国よりも大きいという事実が、両者の相違をさらに強めることになった。西側諸国の兵士と水兵間のライバルはほとんどスポーツとみなしているのに対して、日本では神の栄光と靖国神社で優れた場所を得るために競争しているのである。

日本の報道で軍隊が北方でロシアに対して攻撃するか、それとも南方のイギリスとオランダ領東インドに対して攻撃するかについて熱く議論していた時に、これら三国への攻撃はすべて有望視されており、東京の著名なライターが極めて愚かな議論だと指摘した。彼の言うには、日本の使命は両方への拡大である！彼はいくつかの正当な歴史的事実を挙げ、これらが彼の見解を裏付けるだけではなく、日本人はその原理を、国のバイブルが書かれる前から、適用してきたと説明した。

作家の武藤貞一の説明によると、南方と北方への拡大の計画が支持されるようになったのはいずれも、明治天皇（在位は 1867 年から 1912 年）が天皇になった初期まで遡る。この時代には西郷隆盛が陸軍に関わり、朝鮮へ武力を送ることを主張した主要な支持者であった。その一方で弟の西郷従道は海軍側につき、台湾征服を好んだ。しかし、両者は中国に対する攻撃には同意し、先ずは戦争に勝利し、戦利品についての議論は後で行うことに決めた。

1895 年の日清戦争後の講和条件において、海軍の西郷従道と山縣有朋元帥陸軍大将の間で、中国からの割譲について意見の対立があった。山縣は大陸の遼東半島を足掛かりにすべきだを主張した。遼東半島は今後の満州への作戦のための基地としてうってつけだった。海軍はこれに全面的に反対した。西郷は日本に「運命づけられている」のは北方ではなく、南方への拡大だと述べ、同時に、南方には天然資源が豊富であることを指摘した。彼は南方への足掛かりとして台湾を要求した。伊藤公爵はすでに述べたが、著名な憲法論者で、この時は総理大臣だった。彼はどちらが有利かを判断することが出来ず、明治天皇に仲裁を仰いだ。明治天皇は彼の忠実な支援者のどちらも怒らせたくなかったため、遼東半島と台湾の割譲のいずれも反対しようとはせず、これが実際に起こった。

しかし、他国の列強からの干渉により、明治天皇は半島を返還せざるを得なくなった。この、日本が公的に恥をかいた歴史上数少ない出来事の一つとなったとき、明治天皇は偽善と二枚舌の傑作である詔勅を発した。まず、天皇は日本が中国に対していわれのない、冷酷な一連の攻撃を開始した理由を説明した。「我々が中国に対して武力行使を捧げるのは、東洋に恒久平和を確保したいという願いであり、これまで通り一貫している。」平和を愛する天皇は、平和を愛する他の国々から「友好的な勧告」を受けたと指摘した。それらの国々は、ロシア、ドイツ、フランスで、共同で、日本が早急に遼東から撤退しなければ、天皇が「東洋の恒久平和を害する」戦いを挑むことになると警告を発したのである。明治天皇は、失望した皇民に対し、全体的な状況から見て「寛大な命令に従う」ことは恥ずべきことではないと説明した。それから十年も経たないうちに、軍国主義者たちは皇民の前で明治天皇の面目を失わせたロシアを攻撃した。その後、彼らはドイツに対する連合軍の勝利を分かち合う喜び

を味わい、1941年に極東からフランスを追い出すことで、日本は日本の侵略を阻止する動きに加わったフランスに報いた。

(**国立公文書館デジタルアーカイブ

「御署名原本・明治二十八年・詔勅五月十日・占領壤地ヲ還付シ東洋ノ平和ヲ鞏固ニス」

朕嚮ニ清国皇帝ノ請ニ依リ全權弁理大臣ヲ命シ其ノ簡派スル所ノ使臣ト会商シ両国講和ノ条約ヲ締結セシメタリ 然ルニ露西亜独逸両帝国及法蘭西共和国ノ政府ハ日本帝国カ遼東半島ノ壤地ヲ永久ノ所領トスルヲ以テ東洋永遠ノ平和ニ利アラスト為シ交々朕カ政府ニ懲湧スルニ其ノ地域ノ保有ヲ永久ニスル勿ラムコトヲ以テシタリ 顧フニ朕カ恒ニ平和ニ眷々タルヲ以テシテ竟ニ清国ト兵ヲ交フルニ至リシモノ洵ニ東洋ノ平和ヲシテ永遠ニ鞏固ナラシメムトスルノ目的ニ外ナラス 而シテ三国政府ノ友誼ヲ以テ切偲スル所其ノ意亦茲ニ存ス 朕平和ノ為ニ計ル素ヨリ之ヲ容ルルニ吝ナラサルノミナラス更ニ事端ヲ滋シ時局ヲ難シ治平ノ回復ヲ遲滯セシメ以テ民生ノ疾苦ヲ釀シ国運)

同時にあるいは交互に二方向へ拡大させるという「明治政策」は天皇には陸軍も海軍も統制できないという事実を認めたに過ぎず、陸海軍それは何時、何処へ行くのが最良なのかを自分自身で考えて行動していた。陸軍と海軍が朝鮮と台湾に足掛かりを確保したのは、今後のアジア大陸と南太平洋領域を完全支配するためであった。朝鮮と台湾確保が直近の日本の歴史の進路を決め、この時から日本の軍神道の精神の洞察力を持った日本人学生と外国人学生は、中国、ロシア、英國そして最終には米国への戦争について検討するようになった。

朝鮮、満州国と中国における陸軍によるテロ、搾取、抑圧は海外でも良く知られているが、台湾における海軍によって全く同様な手段が行なわれたが、このことは殆ど知られていない。この理由は台湾を訪れる外国人が比較的少なく、訪れても見学禁止場所が非常に多かつたためである。中国南海岸から離れた美しい熱帯の島が、日本によって、オランダ領東インドと南太平洋にある外国の領有区域を征服するための海軍の主要基地へと変わった。日本が太平洋を攻撃することを決めた時、台湾は南方における日本海軍の広範囲な軍事行動のための中核となった。台湾はこれらの軍事行動の最も重要な地点であるがために、同時に日本のアキレス腱もある。そこは日本の太平洋の南西区域での防御と攻撃の両者の軍事行動を行うための主要な前哨基地であり、日本本土との関係はハワイ諸島と合衆国との関係と同じである。ハワイの消失は合衆国の西海岸がむき出しになり、直接的に攻撃を受けることになるであろう。同様に、台湾の陥落は日本の西部と南部の沿岸が爆撃と侵略を受けやすくなるであろう。

日本海軍が対処しなければならない深刻な国内の問題の一つは、中国人の問題である。伝統的な日本の植民地政策である搾取は中国でも行われ、台湾の人口五百万人の 95 パーセントを占めるほとんどの中国人が奴隸レベルにまで抑え込まれてきた。彼らの日本人に対する敵意は、抑圧のためだけではなく、日本と戦争をしている同胞中国人への同情のためでもある。日本人が台湾系中国人を深刻な懸念と疑念を持ちながら見ていることが、1938 年初めに中国飛行機で、台湾の首都である台北市の爆撃を目撃した後、東京に到着したアメリカ人教師ジョージ・カーによって明らかにされた。彼は、日本軍が政府の主要な建物の周りに急いで土嚢を積み、機関銃を設置したのは、攻撃してくる飛行機に対してではなく、日本人が反乱を恐れた原住民に向けられたものであると報告した。

数年間、台湾に住んでいたアメリカ人は地下では暴徒の動きがあることに気付いていたが、その動きは極秘下で行われており、その規模を知ることはできなかった。しかし、日本が台湾本土と周りの島の間で行われている相当な量の銃を規制しようとしていたことは知られている。台湾本土と周りの島では銃の所持は違法であり、見つかった場合は直ぐに処分された。しかし、反徒の動きは日本の抑圧によって弱まるよりもむしろ強まっているといわれている。日本の陸海軍は台湾の労働者を集めて、日雇い労働者として、中国の占領地に強制的に送っただけではなく、裕福な台湾人を日雇いとして徴兵し、さらに、彼らの資産を没収したり、彼らを不審行為として、島から退去させたりした。

朝鮮人が台湾人と連携すれば、両民族に対する日本支配が脅かされる可能性が高まるため、日本はこれを阻止するため、男性朝鮮人の台湾入国を禁止した。朝鮮人の売春婦のみは許されたが、売春婦は日本人の寛大さに非常に感謝しているといわれても、信じられるわけがない。

中国ナショナリズムを弱め、住民を日本ナショナリズムに改宗させる試みが、ミカドの部下たちの一般的な植民地政策であり、彼らは土着の宗教的崇拜を妨害した。日本人が多くの台湾が崇拜している場所を破壊し、土着の人々に日本の神道を押し付けようとしたことが報告されている。この政策は失敗に終わった。神道の神棚が維持されているかどうかを調べるために台湾人の家に頻繁に立ち入った日本の警察は、そのような祭壇が配置されている部屋に案内された。しかし、別の部屋には人目につかないところに台湾人土着の祭壇があり、そこで密かに崇拜が続けられていた。

教育制度は台湾人の指導者の出現を抑えるために、台湾人の知識を制限するように策定された。書物の監視は日本よりも台湾の方が厳しかった。台湾人を日本のナショナリズムに改宗させるためには、朝鮮人の場合と同様、小学校から日本語のみが教えられ、母国語でしゃべることは妨げられた。台湾人には官職への資格がなく、日本人のみに就かせていた。また、専門職としては医師だけは許されていたが、恐らくこれは日本人の医師が不足だったためであろう。

台湾は原住民にとっては地獄だったとしても、住民の残りの 5 %、つまり、二十世紀の日本人の主（あるじ）にとってはパラダイスだった。彼らは戦艦と一緒に神聖な征服の象徴である、神道の宮司と神社を持ってきて、日本の神々と先祖からの魂が新たに宿るように土地を清め、神武天皇に彼のための新たな屋根のための新たな隅が建てられたことを報告した。他に日本の征服の象徴として、三井と三菱の銘板があった。これらは他の財閥と共に、艦隊から遠く遅れずに、原住民に従事させ、島の天然資源の開発に取り組んだ。

台湾に住んでいたアメリカ人たちは日本人による台湾の発展を見て、その組織の驚くべき能力に感嘆した。台湾には首狩り族がいたため、中国人からは放置され、荒涼とした土地があったが、日本人がそれを正真正銘の金山へと変え、莫大な利益を生み出した。満州国と中国への侵攻では日本に経済的損失を引き起こしたが、台湾は日本の全植民地事業の中でも真珠に値した。石炭、砂糖、お茶等の島の資源を開発させた日本の強烈さに、複数のアメリカ人は、組織と搾取においては日本人はローマ人に値すると確信した。

(**属州 wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B1%9E%E5%B7%9E>)

豊富な南国の島である台湾で日本の大東亜の夢が生まれた。台湾での海軍と経済事業の両者の成功は突出しており、陸軍による中国での四年以上が過ぎても実がなく、目標もなく、費用がかかる長旅とは対照的だ。日本人にとって、台湾は魔法の鍵であり、これによって南の暖かい扉が開き、中国で行き詰ったミカドの軍国主義者たちに活路が提供され、ますます注目するようになった。これは「八紘一宇」の大きな強みである。八紘一宇によって、全て、あらゆる方向へ拡大のため、複数な解決法を提供することが出来る。

海軍は神からの命令に答える準備が出来ていた。台湾は既に発展しており、極東で最大な海軍基地であるばかりではなく、南太平洋諸島について詳しく熟知している専門技術者と海軍のベテランが多数いた。台北には政府 (**台湾総督府) の二つの大きな学校があり、台湾が南方の島々への最終攻撃のための訓練場になった。台湾総督府高等商業学校はカーが英語を教えていた学校で、日本海軍が攻撃開始する前に必要な情報を提供することに特化されており、ここで部隊員が養成された。台北帝国大学は 1929 年に設立され、実務に必要な技術者を養成した。どちらの学校も、オランダ語、スペイン語、ジャワ語を含め、七言語のうち、一つ以上の言語が教えられ、台北帝国大学では学生数よりも教授数の方が多く、全職員は殆どの時間を南方区域の発展プロジェクトの仕事に従事していた。大学の学長は日本の外務大臣よりも高い地位にあり、これは南方へ拡大する準備が出来ている者には名誉が与えられ、重要視されていることを示している。台湾の日本人は彼らの進む方向について何の疑問も持っていないかった。カーは 1937 年に、待望の 1946 年フィリピン独立を祝うために台北で行われた仮面舞踏会パーティーに出席した生徒たちの写真を贈られた。(** Wikipedia フィリピンは 1935 年にアメリカ合衆国ルーズベルト大統領がフィリピン独立を承認し、1946 年に独立することになった。1935 年以降は独立を向けての移行政府になって

いた。)

南方への進行開始が近づいてくると、台湾の日本当局者による外人排斥方針が高まり、協調して、一握りのアメリカ人とイギリス人の追放が推し進められた。台湾は日本の南部の主要基地であるという重要性から、日本人は秘密漏洩への狂信的な予防措置を講じた。この島には警察、諜報部員、訪問者が多数いた。日本本土にいる外人居住者のほとんどがスパイだと見なされていたが、台湾では全員が外国代理人だと疑われていた。その疑いはアメリカ人とイギリス人だけではなかった。イタリアとドイツの船が、欧州戦争の開始で台湾の港に避難した時に、乗組員の上陸は許されなかった。これは、日本が枢軸同盟国に抱いていた信頼の程度の表れであった。

台湾におけるアメリカ人に対する反感で二つの醜い出来事が起きた。アメリカのお茶輸出業者の妻が工事中の細い道を自転車に乗っていると、停止され、自転車から降りるように命じられた。女性には軽い難聴があり、その日本人の作業長が叫んでいるのが聞こえず、そのまま進んだ。彼は白人の女性アメリカ人が神聖の子の命令を意図的に無視したと思い、激怒し、突進して、彼女の自転車を力いっぱい突き落とした。彼女は負傷し、激怒したが、冷静な判断で、出来事に対する日本の当局者トップの反応を見ることにした。アメリカ領事館が総督府の当局者への抗議を申し立て、謝罪を求めた。日本人は申し訳なかったと、律儀に謝罪し、その後、その作業長をその愛国的行動により、より良い仕事へと昇進させた。

二つ目の出来事の結果はあまり良くはなかった。松尾は忠実な、評判の良い日本人で、台湾のアメリカ領事館に18年間働いていたが、ある日、彼の事務所に現れなかった。アメリカ職員が調査して、彼が逮捕されていることが分かったが、日本の当局者はその理由説明を拒否した。その頃までに、アメリカは日本に国家間の取引を知らせるための唯一の対抗手段は報復であることを学んでいた。彼らはマニラに電報を送り、松尾の逮捕の説明があるまで、マニラに寄港している日本船への出港許可証の交付を延期するように頼んだ。複数の日本船が停船されてから、日本からの説明があった。彼らの言うには、松尾はアメリカ領事館のスパイの疑いがあるとのことだった。領事が言われたのは、それが説明をしたがらなかった理由だった。なぜ日本は彼が合衆国政府のスパイだと考えたのか？日本人はこれは非常に健全な理由だと答えた。松尾が彼らに合衆国からの今後の自動車輸入量を尋ねたのだ。彼はこれまでの18年間も彼の業務として、ずっと同じようにやってきて、それによって今後のアメリカから台湾への輸出を見積もっていたので、アメリカ当局者は驚き、抗議した。そんなことはないというのが、回答だった。今年はこれまでと違いがある事が理由で松尾はスパイということになった。

その通りだった。日本海軍は大規模攻撃の最終準備が行われており、彼らは松尾にはアメリカ政府に貢献するよりは、独房にいることを望んだ。海軍の熱狂的な活動の一つとして、かつて船員の将来の活動のための健康を維持するために使われていた野球場を含め、島中の

あらゆるところに病院が建築されたが、この熱狂的な活動が暴露されることで、彼がアメリカ政府に、ある意味、貢献していたかもしれないからだ。

台湾における海軍の実績を見ると、陸軍が「過激派」であるのに対して、一般的に誤解されている、海軍は「稳健派」であるという話は既に何年も前になくなっていることが分かる。もし、海軍が長い間「稳健派」だったとすれば、それは、過激派になる機会がほとんどなかっただけあって、政府や国民ほど神聖な使命への熱心さを自覚していなかったからではない。海軍は残虐な爆弾を重慶市などの街に落として、役割を果たした。もし、海軍が民主主義諸国に対する早急な攻撃を拒否したとすれば、それはアメリカ海軍が大西洋に消散し、極東での日本海軍の優位性が得られるまで待つ必要があることを認識していたからである。

もし東京の外国人社会にいる知的で無益なメンバーが海軍は陸軍の軍人よりも、ワシントンとロンドンにいた時間が長く、民主主義的な方法と思考に従順だから、「稳健派」だと信じ、安らぎを見出したのならば、わざわざ、西洋からその民主主義的な方法と思考を奪おうとする日本人はいないはずだ。もし、ロンドンに駐在中には最も有名で、結婚して、同じ「稳健派」の三井家とも関係ができた、前海軍次官と前外務大臣の豊田貞次郎大将のような男の存在によって、彼らの信頼が強化されているのであれば、彼が民主主義諸国への攻撃準備に少なからず関与し、また、三井、三菱と他の資本財閥は南太平洋のアメリカとイギリスの会社の油田を引き継ぐのを待っているだけだと知れば、受け入れたくない仕返しを感じることになるだろう。

確かに、大将と少将の制服、英会話、人前での振る舞いは陸軍の同僚よりも良い。しかし、西洋風の二角帽の下には陸軍と同じ侍精神、同じ神道の神々への信仰、そして、大東亜共栄圏建設という神聖な使命を遂行しようとする同じ狂信的な熱意を持っていた。この大東亜共栄圏には十億人以上の人々がいて、莫大な価値がある資源があり、海軍はこれらから、台湾と同じように厳しく搾取し、今まで以上に巨大で、強力な無敵艦隊を作り、世界の八隅を一つの屋根の下に置こうとする神からの指令を妨害しようとする如何なる者に対しても挑戦するのだ。